

国家、風土、情報

永安 幸正

目次

- 一、情報の理解の仕方
- 二、風土情報力——風土と文明の型——
- 三、脚下照顧——郷土の衰退と変容——
- 四、天然自然——生命系の中庸哲学を——
- 五、社会情報力——情報システムと危機管理——

一、情報の理解の仕方

松尾芭蕉（一六四四—一六九四）は忍者であった、という実しやかな噂がある。はたしてどうであったのか。これは、興味深い問いではある。

国家が戦争に勝つか負けるかは、敵の実力と戦略と行動を知るかどうかが決定するといつてよい。だが

ら昔であればワッパ(輪破)つまり忍者が欠かせなかった。ゾルゲ(二八九五―一九四四)のような敵方のスパイもその部類であるが、日本は危うく手玉に取られそうになった。

現代の国家間の戦いや交渉では、相手国の情報通信網を走る暗号の解読が生死を決する。対中戦というより、主に対米戦であった太平洋戦争では、暗号の解読力の勝負であった。この種の情報の分野は、昔から「インテリジェンス」(intelligence、諜報)と呼ばれてきた。今日、これよりもっと広い意味で、情報は、「インフォメーション」(information)と名づけられている。

だが、国家の命運を決するのは、戦争における情報戦のみではない。

時折、新聞沙汰になるが、学者がアメリカに留学し、向こうで研究を終わって帰国するさいなどに、コンピュータのフロッピーに秘密の情報を記録して持ち帰り、産業スパイ、研究スパイとして摘発されることがある。これは、学問や科学技術の研究、あるいはビジネスにおいて発生する情報の戦いの現れなのである。しかし、逆に日本から持ち出すことは無いのかどうか、殆ど報道されることはない。

人類は、元来民族という血縁集団としてまとまり、それが国家という団体組織へと発展してきているといつてよい。しかし、単なる血縁の集団であれば、それは遺伝子情報を共有するというのみにとどまり、その情報では生物的な力を決定するだけである。しかし、国家には、それを超えたいくつかの種類の情報力というものが在るのである。

そもそも、情報とはいったい何のことであろうか。この歴史論ノートでも繰り返して、各方面にわたって取り上げてみるが、情報は多次元の存在物であるので、簡単に定義するのは難しい。

そこで先ず、情報 (information) について少し突っ込んで考えておこう。情報というものは、分かったようできて分ならず、曖昧な意味の広がりを持つるもののように思えるが、しかしやはり情報という言葉記号にも、その言葉記号で言い表し、書き表そうとする指示対象が明確に存在するのである。

物事を理解するには、「言葉とその言葉の指示対象との関係」を掴むことが大切である。われわれは、言葉とその指示対象——についての考え、概念——との関係が精確に確かめられたとき、「意味が分った」と思うのである。これは文化の重要問題の一つである(池上嘉彦ほか「文化記号論」講談社学術文庫)。

例えば、今、道端に四本の足をもった一匹の動物が座っていると、その動物が犬という種類の動物群——そういう動物についての世間の概念——に属すると確かめたとせよ。そうなると、納得して、「あの動物は犬である」と自分の頭に分かり、「ああ、あれは犬である」と口で発音し、書き表しもする。

情報とは、次のように重層的な概念をもって理解ができる存在である。

① 物質エネルギーの形(フォルム)——物質エネルギーを「乗り物」とし、情報はそれに「乗る者」

- ② 刺激——相手に刺激を与える作用因子（知らせ）といえるもの
- ③ 知識——刺激の経験を積み重ね、蓄えて体系化したもの、その極致は「こうすればこうなる」という因果法則についての知
- ④ 知恵——より良い人生のために物や知識を活かして使う指針である「活用の知」

情報とは、最も根源的には、「物質エネルギーの形」である。古代ギリシャ時代の人々は、物には素材（マテリア）と形（フォルム）とがあると理解した（伊藤守は「パラダイムとしての社会情報学」早稲田大学出版部）。「物質エネルギーの時間的・空間的・定性的・定量的パターン」が情報である。

パンを作るとは、粉という素材に、イースト菌の働きを利用し、人間が捏ねて形を与えたもの——イン・フォルムしたもの——である。その形には、香りや美味しさと、作る人の気持ち、感覚、思いが込められているのだろう。それらも併せて、そうしたパンの形が情報というものなのである。

他に、水は H_2O という分子からできているが、それぞれ原子 H も、 O も、無数にある宇宙の中の物質の形の一例、分子の H_2O はより複雑な形の一例である。これに鉄を浸しておくと、鉄と水とが刺激し反応し合って、やがて赤いサビ、つまり水酸化鉄というものが出来てくる。鉄も水も形を変化させるわけである。

こうなると、情報とは相手に刺激・指令を与えて相手を変化させる「作用因子」であり、「刺激」であり「知らせ」だといえる。もちろん、その際、自分自身も反応し変化する。ミクロの世界に降りて行くと、こ

の作用因子の元は、恐らく原子核とその周囲を回っている電子というものの働きであろうか。

宇宙の中で、ビッグ・バン以来、物質エネルギーが複雑になり、物質が発展して高度となり、生命という段階に達すれば、遺伝子（ジーン）という化学物質が生じる。遺伝子は主にタンパク質であり、タンパク質もチッソ N を含む巨大分子からなるので、物質エネルギーの形の一種に違いない。

まさに、この遺伝子という形の物質は、物質に作用を与えて別の形の物を生み出す。

情報は何かを「伝える」ことにかかわるから、「心—脳」問題とかかわる。（この点は立木教夫「現代科学のロスマロジー」（成文堂）が詳しい。参照されたい。）

卵子と精子が出合って胎児がだんだんと育つが、このプロセスでは遺伝子という設計図に基づいて身体の形ができ、手足が発生し、内臓も発達する。皆これは物質の変化であり、物質に対する遺伝子からの刺激指令による発生作用である。

遺伝子工学は、人間がこの遺伝子という設計図に細工を加える営みである。今日問題になっている遺伝子組み替え作物はその産物であるが、古来、農作物や家畜の品種改良では、遺伝子組み替え——掛け合わせ・交配や、選抜によるもの——は何ら珍しいことではない。

大地と海洋の生態系には、自然の遺伝子が資源として蓄えられている。野生生物は、この遺伝子という情報資源の宝庫である。国土の豊かさは、次のような物質と生命の形での情報資源の蓄えに外ならない。

一、物質エネルギー資源の形（いわば物質遺伝子）

- ① 土と水と大気
 - ② 金属と非金属の資源で、ウラン鉱などの原子力資源に含まれる放射能としての情報
 - ③ 石油とか石炭などの化石エネルギーに含まれる情報
 - ④ 地熱と、水力や風力や、海流などの形でのエネルギーに含まれる情報
- 二、生物——微生物、植物、動物、人間——の生命遺伝子と脳神経系及び文化に含まれる情報

情報が反応を生み出す刺激であるとすれば、その刺激の経験は、繰り返され、人間の身心に記録され、整理され体系化されて、「知識」となる。ここから、情報は知識であるということになる。

知識というものは、感覚器官に入ってくる刺激を整理し、分類し、系統立てて、出来事の関係に法則というような順序がつけられたときに出来上がるものである。美味しいとか、痛い、熱いなどの感覚器官や内臓の感覚も、その刺激を積み重ねて行くと知識を生み出す。お袋の味とか、生活習慣というものの基には、五感と内臓を通じて獲得した知識が秘められている。

この知識は、個人だけでなく、集団においても、集団無意識という形で集団の文化の土台となるが、それも知識の一種である。

しかし、知識には「知恵」という一段と上位の内容のものがある。「あの人は知識は沢山持っているが、

足りないものがある、つまり知恵が足りない」といわれる。

知恵とは、何かを活用する時の指針である。知恵とは、古代ギリシャの哲学者に倣って、「活用の知」ということができるであろう。知識と同様に、知恵にもまた、個人の知恵と集団の知恵とがあるし、意識されたものと無意識のものがある。

大学教授として、ある分野の仕事に優れた業績を上げた高名な人物でも、自分の感情を野放しにし、家庭の採め事一つうまく処理できず、人に嫌われ、不遇な状態で晩年を送る者もいる。人間関係をうまく調和させながら歩むための知恵が足りないわけである。

糖尿病のように、——遺伝的な因子の作用があるかもしれないが——悪い生活習慣がもとで病気に罹って苦しむのも、人間としての知恵が身についていないのである。

われわれ個人でも、家族集団でも、民族とか国民というような集団でも、その運命を決定するのは、この知恵という極致の情報である。「知徳一体」ともいうし、「徳としての知」という風にもいえるものである。

情報というものは、コンピュータやインターネットなどの最先端の機器やシステムだけとかかわらせて理解するのではなく、人類のこれまでの歴史の成果と結びつけて位置付けるべきなのである。

情報とは、この宇宙の物事がどうなっているかについての知である。だから、その知なくしては何事も始

まらない。暗闇の中では柱についての情報がゼロであるため、柱にぶつかって痛い目に遭うことになるのである。

二、風土情報力——風土と文明の型——

国家という人間集団の生命力を情報の観点から解いてみると、いのち集団にとつての情報力というものが浮かび上がる。第一にその集団が所有する領域——国土、海域、空域——と、人間そのものに埋め込まれている情報である。国民という人間集団は、その遺伝子が大きな情報資源なのである。近年の中国やインドの新しい発展は、その巨大人口の情報と外から入る多国籍企業の情報との化合である。

各国の森林や原野、川や海には、さまざまなバクテリア、動物、植物が住んでいて、独特の生態系を形成している。これも生命情報のシステムであり資源である。

アマゾン河流域からアンデス山脈までにわたるブラジルという国は、主にポルトガル人が侵略し植民して建てた国家であるが、毎年開発と称し膨大な森林を伐採している。それによって今育っている樹木が失われるだけならまだしも、実は生物遺伝子が数多く姿を消しているという事実が、より深刻であり、心配すべきものである。

地球の裏側の国のことはともかく、われら日本の国土でも、例を作物にとれば生物遺伝子の貧困化が憂慮される。水稻のササニシキやコシヒカリというような品種は、元来、東北や北陸にのみ適すると思われるものだが、大消費地である都会の人々の味覚に合い、「これは味がよい」というので全国的に需要が増え、それに応じて農村での作付が拡大し、全国どこに村々にもその系統の品種が栽培されるようになった。これは、流行によって生物の遺伝子が単純化し、画一化するという危険な現象である。

国家の生命力を存続させるには、こうした自然環境遺伝子の貧困化は避けねばならないのであり、各国とも植物の生の遺伝子——在来種や原種——を保存する努力を怠ってはならない。地表をコンクリートで覆い、野生の植物や動物を殺すような国土管理は甚だ危険なのだ。国家の自然環境情報力を破壊することにながらぬよう、野生を保存するよう、心しなければなるまい。

陸上と共に、いま一つ重要なものは、海洋生態系の多様性である。日本近海は亜熱帯から亜寒帯に到る幅広い生態系をカバーするところであり、熱帯だけあるいは寒帯だけの海域と比べて、貴重な遺伝子資源の宝庫である。この範囲はいわゆる近海漁業の対象海域であるが、この海域の生物情報資源を収奪しないように注意しなくてはならない。

陸上の海つまり森林については、深刻な反省点が浮かび上がる。第二次大戦後には、日本列島上では杉と檜の植林が多く地域へと普及した。私も中学、高校時代に、その一斉植林運動に馳せ参じた覚えがある。しかし、その結果やいかに。不適切な条件の場所にまで、同じ杉や檜が植えられ、その後、安い外材の輸

入の激増によって、せっかく植林された杉や檜の材木は二束三文でしか売れなくなり、人々が山林に手入れをする意欲も費用もなくなつて、日本列島の山は荒れ果てて泣いている。

そもそも、杉や檜ばかりの人工森林よりも、縄文時代の人々が木の実を採取していたブナやクヌギやナラやクリなどの雑木林のほうが、もっと安定した生態系なのである。杉や檜の「美林」は、それを山全体に拡げすぎれば問題となる。この意味では、植林によって、日本列島の山林風土は、樹木の種類が単純となり、劣化したのであった。

自然環境はその上に風土を生み出す。風土とは、人間が生自然環境と、それに働きかけるやり方——精神と、具体的、生命的、物質的な技術とが合体して大地の上に構築されたものの全体——のことである。風土は歴史が出来上がるための基本であり、土台としての役割を演じる。

熱帯地方から、亜熱帯、そして温帯へと、南から北に向かって歩くと、植物の相が大きく変化するのを知

る。この環境条件の違いが、それぞれの地方での人々の食物の作り方、家屋の作り方、道の造り方の違いと深く絡み合っている。

南船北馬というのは中国大陸での古くからの言葉であるが、揚子江など南方では水が多く、川や沼やクレーク（運河）が四通八達して豊かなので、船が能率の良い交通手段として不可欠なものとなる。また、牛が重要な動力源であり牛車や牛耕が多くなる。

より北方では、乾燥した硬い大地のため馬が欠かせない動力源となり、乗り物となり、広く馬耕が行われ馬車が使われている。

風土によって、植物つまり作物を育てる方法も違ってくる。作物は、牧草を含めて、人間が生きて行く上では最も基本的な恩人——恩物——であつて、土と水と太陽光線とから澱粉、炭水化物を創ってくれる。

人間は生物を育てるし、道具を作り道具を使う動物とはいふものの、しかし人間は第一の創造者ではない。第一の創造者は緑色をした植物である。いくつかのバクテリアも炭酸同化作用を行う生物の仲間に入るようだ。

日本列島には、味噌、醤油、酒、漬物など豊かな醸造文化の蓄積があるが、これも風土情報力の賜物である。自然環境の情報力はこの風土情報力と直結している。

しばしば「農業は環境破壊の産業である」という見解も見られるが、成程、そもそも人類が作物を栽培するということ自体、それ以前の生の自然環境の変更につながるものといえよう。この点はどう考えればよいだろうか。

水田耕作を続けるシステムの場合、一定の自然環境の中で、水田という安定した生命循環システムを継続するものであり、水の循環と保持に秀でている。農耕は元の自然環境に変革を加えてはいるが、そうして出来上がった水田システムは、それ以上自然に負担を加えない安定した、慎まやかな風土を形造るもの

である。

タイの首都バンコク郊外の「水上市場」(Floating market) は、観光地として有名であるが、そこを訪ねると、何より舟に積んで売っている果物や野菜の種類が日本の物と違う。大きなパイヤとかドリアンがいくらでも買えたものだ——残念なことに、二〇〇四年十月、知人の報告によると、フロートイング・マーケットは消えてなくなっているそうだ。スーパーの生鮮食品売場が、取って替ったのであろうか。タイでは、地方に行くと、水上に筏を組んでその上を畑とし、野菜を育てるものが多かった。泥で濁った水が肥料を運び、土の役目をした。

また、インドのニューデリーから北西にインダス河の方に向けて列車で走ると、半分砂漠の地帯があつて、所々に赤い粘土を掘ってレンガを焼く「工場」が目に入ってくる。焼かずにただ天日で乾かして固めるだけのところもある。それが、建物を造るうえで基本の素材となっている。その地方では、石というより、土とレンガの文化である。高いエンツツもあるが、それもレンガを積み上げて造っている。

鉄筋コンクリートのビルが立ち並ぶ都会という風景は、そこには現れてこない。建物は土から焼いたレンガ造りである。

しかし、イギリスのロンドンに行くと、そこにはレンガの他に「石の文明」が加わる。文明の素材がレンガと共に石なのである。歌手のポップ・テイランがよく通つて来て歌っていたという小さなカフェがある。ピカデリーサーカスから程近くに石造りのビルがあり、石を積み上げて出来た地下室があり、その壁は二五〇年前の古い石材である。ローマでも、パリでも似たようなもの。

イギリスでは、石とレンガで建物の枠を造るため、日本のように築二十五五年が建築基準法の上での耐用年数だ、などということはあり得ない。九十年だという。

そこで計算してみると、生涯かけて人間一人のいのちを維持するために、建物つまり住居に掛かるコストは、イギリスは日本の四分の一位で済む。停滞した物静かな社会というのがイギリス人の暮らしについての外から見たイメージであるが、中に入ると歴史を重ねた豊かで静かな生活が息づいている。

あくせくと働き、物を使い棄てる日本型の文明は、本来、イギリスのものではない。イギリスは、二五〇年前の産業革命発生の地ではあるが、現代のめまぐるしい文明の故里ではない。スーパーマーケットやショッピングセンター型の使い棄て文明とは、二十世紀アメリカ型の文明の姿であろう。現代の日本の生活文明は、アメリカ型のものを、一生懸命、忠実に追いかけて出来上がったようだ。文明にはモデルがある。

風土とは、自然界に人の手を加えて出来上がるものであるとすれば、土木技術に込められた情報つまり思想と知識は、まことに重要なものである。若い頃に専攻し専門家から学んだところを思い起こすと、それは次のものから成る。

- ① 自然災害の防止のための砂防や水防の技術

- ② 灌漑水路を含め水田や畑を造成する技術
- ③ 谷を越え川を渡る橋と道路、水路などの、交通施設を建設する技術
- ④ 人々が集まって会合や運動などを行うための場所造りの技術
- ⑤ 建物などの構築のための技術
- ⑥ 一般の工場敷地やエネルギー関連の施設造りの技術
- ⑦ 現代重要となりつつある廃棄物の処理施設の技術

今日、国家財政の行き詰りとともに、日本は「土建国家」であるという批判が厳しい。なるほど、国家の公共事業に占める土木工事のウェイトは小さくない。地方に行けば、台風とか地震などの災害が土木工事を必要とさせ、土木工事があるからこそ冬の間の仕事が途切れななし、都会に出稼ぎに行かなくともよい、というような時代が確かにあった。

吉幾三さんの歌謡曲「津軽平野」は、そういう苦しく悲しい出稼ぎ時代での東北地方の家族愛を歌った名曲である。

1. 津軽平野に 雪降る頃はよ
親父ひとりだ 出稼ぎ支度
春にや必ず 親父は帰る

みやげいっぱい ぶら下げてよ
淋しくなるけど 馴れたや親父

2. 十二みなどは 西風強くて
夢もしばれる 吹雪の夜更け
降るな降るなよ 津軽の雪よ
春が今年も 遅くなるよ
ストープ列車よ 逢いたや親父

3. 山の雪どけ 花咲く頃はよ
かあちゃんやけによ そわそわするね
いつもじよんがら 大きな声で
親父うたって 汽車から降りる
お岩木山よ 見えたか親父

代議士も、自治体の首長も、「あの橋は自分が架けさせた」というように、国家財政から予算を引いてくることが、その主な任務であり腕前の見せ所であった。だが、土建国家である、公共事業とは土木工事のことである、と批判するのは易しいが、土建国家である

のは、日本が災害国家であるという環境的、風土的な宿命からも来ているのである。しかしそれだけに、貴重な財政資金を使うに当たっては、知恵を絞らねばならないのである。

以上のような人工物は、長い歴史の中で積み重ねた経験から得る工夫と、新しい科学技術の応用との成果である。しかし、残念なことに、それはしばしば生の自然環境における「いのちの循環」を遮断し、自然資源を脆弱化することがある。

水防ダムは洪水防止には大いに役立ったが、ダムの弊害も小さくないのである。川に設けられる垂直の堰は魚など水生生物の移動を遮り、川の生態系を攪乱する。シジミやアユやウナギなど川と海の間を上下流にと移動する魚貝の邪魔をする。人工的風土のマイナス作用である。

堰を造る時には、魚道を川幅全体に広げて、なだらかな流れの道を魚に与えるべきなのである。今まさに、土木技術の根本思想を革新しなくてはならない時代である。

三、脚下照顧——郷土の衰退と変容——

民族や国家が一つの団体組織として力強く存続発展するには民族、国民の内部での分業と協業を図り、国民各自に任務を分ち与え、異なる任務につく各自を全体として結集していく原理が働かねばならない。その国家統合の原理を「国体」(こくたい)というのである。

この点からみると、日本は少なくとも二〇〇〇年の長きに亘って、良質の国家形成を行ってきた。天皇・朝廷を中心とする日本型の国家体制つまり「日本国体」は、幕府の出現と交替を招きながらも、終始一貫してよく働き、世界史の中で他国と比べても国民の幸せな生活を造り出してきたといつてよからう。その核心の那辺に在るかは、民族の魂と日本神話に関する章で考えるので、ご覧いただきたい。

特に、日本は、頼朝の鎌倉以来、幕府体制の上で、天皇・朝廷は権力を持たず、権威だけを保持し、しかも幕府が中央集権にこだわらず、「封建制」という地方分権の方式を取り入れたことが、日本国家の足腰を強め、地方——郷土——から多様な人材を育てる所以となった。例えば、各地の学校を、各地は熱心に盛り立てようと努力した。日本の封建制は、国家の足腰を強化するうえで、プラスの役を演じた。

反転して、明治維新から二十世紀末までは、日本は中央集権志向の国家体制を目指してやってきた。それは外国からの侵略の危惧の中で避けられぬ方向であった。

しかし、今、われわれは、二十一世紀の新しい地方自治を土台とする——分裂しない——国家体制造りへと歩を進めようとしているのである。

地方史は、その出身者にとっては郷土史といえることができるものである。郷土とは、一日二十四時間を単位として、人間が歩いて行動し、無理なく往き来し、人と人とが交流することのできる小さな範囲の生活

空間であり、文化空間であった。
文化空間という意味は、生活の潤いや親しみを与える文化——教育、娯楽や信仰——がその空間の単位で営まれていたからである。

この郷土は、元来、明治の初めまで存在した「自然村」にその原型が見出され、その後幾度かの町村合併により他の地域と統合され、名称も変えられたものが多いが、そのように拡大し再編成された郷土空間は、それでも一九六〇年代頃までは、日本全国で各地にかなり良く保存されてきたものである。それは大地と密着した農業や林業や漁業、地場産業が元氣であったからである。

しかし、日本が工業化に突進し、道路網も発達してくるにつれ、いわゆる過疎過密といわれるように、急激に人口の都市集中が進み、農山村や漁村から人々が大量して流れ出る時代が始まった。恐らく一五〇〇—二〇〇〇年の昔から続いていた稲作を基盤とする農村型社会は、一挙に崩壊を始めたといつてよい。

日本の国家社会を支えてきた基盤としての地域空間、そして人々の心を培養してきた郷土には、音を立てて罅割れが走り始めたのである。

現代でも益正月には、日本列島のすべての高速道路と鉄道、航空便が、帰省ラッシュを繰り返す。けれども、郷里に存命中の八十歳以上の年寄りたちがこの世を去って居なくなれば、やがてその帰省ラッシュの波は引いていくであろう。

収穫を祝った村祭りに集う若者の数は激減し、近くの村から訪ねていた親族も、来ることが稀となる。筆者の子供の頃には、歩いて一—二時間、自転車、バスで、沢山の親類縁者が、祭りに行き交い、神々の前のお祝いの膳——直会——を囲み、頃合いをみて、神社で奉納される神楽へと連れ立って出掛けたものであった。

ところが、工業社会と商業社会、つまり市場社会が、一大変化を日本の国家社会にもたらしたわけである。一九六〇年代から、近々、僅か三十—四十年間という時間内の出来事であった。

むろん、人々はそうした伝統的な地域社会から投げ出され、あるいは飛び出たとしても、何もない砂漠にひとり立ったのではない。別の種類の地域社会に加入していったのである。それが「会社」社会という新しい共同体に他ならない。

かつての地域共同体は、会社共同体へと移行したのである。これは、主な仕事の間が旧来の地域の大地から会社へと様変わりしたことを物語る。人々は、それまで全力を傾けていた農耕を土曜日曜に廻して、そそくさと切り上げ、月々金は給料取りとして会社へと通勤するようになる。

都市という移動自由な空間では、人々の共同体が変質する。水田などの耕作を通じて結ばれる固定した共同体と違って、新しい方式を取る。その典型が「株式会社」という組織の作り方なのである。恐らく、株式会社という方式は、これからの人類社会での共同体の方式として、いろいろな分野に応用できるものとなる

う。一部は大学や、宗教団体でさえそうなるう。

株式会社とは、次のような共同方式である。

- ① 一定額の出資金を示す株式を購入し合うことによって、人々の協力から出発する。会社は資本というものの所有者たちの間で結ばれる、人と人との利益共同体（ゲゼルシャフト）である。
- ② この株式所有者たちが「経営者」を選出して雇用し、その経営者（取締役会）が会社組織のマネジメントを任される。
- ③ 会社は労働力（従業員）を雇い入れ、原材料や土地や機械設備を調達して操業を行う。

これだけ考えると、株式会社はもはや「地域」という空間と無関係に活動するかのようには思われようが、決してそうではなく、土地に縛られ、工場や本社や営業所は一定の地域に立地するという意味で、地域性を免れるものではない。

もちろん、その地域性は、農耕社会の場合の地域性と比べて、より広い範囲に散在できる点が異なるが、それでも空間的条件を無視して成り立つものではない。また、従業員を雇用する地域が通勤できる範囲に限定されるとい意味でも、株式会社は限定された地域の中に立地するしかない。

株式会社は、古来の農耕を土台とする地域性を脱するものではあるが、やはり「地域」という空間に基礎

を置くものである。人類の歴史は、依然として地域空間の制約を免れることは出来ないのである。

とはいえ、そうなれば、やはり一緒に準備し、皆で楽しんでいた祭りも、粗略になる。会社のお勤めを優先する。結婚式のメンバーにも会社の人々が増え、地域の仲間の割合は減っていく。葬式や法事でも、業者が取りしきり、地域の人々が総出で加勢するということはなくなる。すべてビジネスと市場に頼ることになる。

私事で恐れているが、最近実の父が九十歳で他界した。故郷には、それでも従来の「しきたり」がどうにか残っていて、十一軒ある「農家」の人々が全戸、集まって葬式の準備をし、夜遅く最後まで残って一切を済ませて頂いた。

しかし、私は二〇〇四（平成十六）年の今年六十三歳であり、しばらくぶりの帰郷であったが、協力するために集まってくださった集落（部落）の方々は、最高齢で九十歳位の方をはじめ、全員私より歳上の人たちばかりであり、只の一軒もその人たちの子供の世代の人物は「帰って」来てはいなかった。皆、他所に出掛けてしまっって、生活の土台は私の郷里から地を払っていたのである。

あと二十年もすれば、今回集まれた老人たちがすべてこの世を去って、人の住まなくなった空家ばかりになるだろう。郷里の崩壊は、すぐそこにまでに訪れているのである。「故郷は遠くにありて想うもの」という感興は、私にも身近に思われるようになった。

明治以来の近代日本は、一面で、先進国に「追い付き追い越せ」として大成功を収めたけれども、他面で、伝統社会——それも千数百年の歴史を有するもの——を完全に壊し去るといふ歴史を演じてきたのだ。最近の市町村の合併騒ぎは、こうした国家社会の構造変動に、一体、少しでも配慮をめぐらしているのだろうか。霞ヶ関にある自治省——今は総務省——の発案が先行しているのではないか。

因に、各地で作られた「何々史」という体裁の郷土史は、一九七〇年代半までのものは質がよいが、「何々市史」となって広域をカバーする郷土史となれば、カットされた事実、記述の漏れや節約が多くなり、まことに惜しいものがある。

何でも広く大きく合併すればよい、というものではなからう。

ともかく、郷土史こそ、個人の伝記、家系、国家史の土台となるべき生活空間の歴史記録であり、今日の市町村合併の嵐の中でも、是非とも急いで保存策を講じるべき分野ではないか。その上で新しい地域ネットワークを意図的に創造すべきであらう。

ここに、過去指向のみでなく、未来に向けての、われわれの歴史保存の一つの役目があるのではないか。

地域というものは、一〇〇パーセントではないが、生活の相当程度がその範囲内で完結する空間である。昔の自然村は、生産が第一次産業——林業や農耕や漁業——であったから、生活は地域でほぼ完結し、した

がって消費も、婚姻や介護、葬儀なども、地域を基地としておむね一日行動圏の内部で行われていた。

ところが近代化——工業化し商業化し市場化、そして情報化——した社会では、生産の局面でも消費の局面でも、交流の面でも、地域の空間は踏み越えられ、婚姻、介護・福祉や葬儀など「いのちの再生産」は、旧来の狭い地域空間から、はるかに遠くまで超え出てしまう。

しかし、それでも、日常の買い物とか介護や医療などは、やはり近隣地域社会にその基本が求められる。

自然環境はじめ上下水道、道路、学校（義務教育）、ボランティアなど「セーフティーネット」には、地域単位が不可欠である。図書館など教養施設の利用も然りである。

地域というものは、歴史の流れとともに、その適切な大きさも、担う役割も変容していくが、いのちの再生産という次元では、相変わらず不易の働きを演じている。

人類の歴史は、グローバル化に向かう。グローバル化は家族、地域、国家の役割を組変えるけれども、それぞれの役割を解体し去るものではなく、今もって、それぞれに相い補い合う新しい役割を担わせるようになるのではないか。

やはり、歴史は家族（家系）——地域（郷土）——国家という重層的なレベルでの三重構造を捉える必要がある訳である。

四、天然自然——生命系の中庸哲学を——

世に、身土不二（しんどふに）という言葉があり、考えがある。これには、いろいろな意味合いが含まれているが、人間はある土地に生まれ、そこに住むならば、そこで穫れた食物を摂取するのが心身に一番良い、ということが言いたいらしい。

確かにこれは、食物の穫れる自然環境と農地や海や川の質と、そこに生活する人間の心身の健康とが直結している、という一面の真理を言い当てている。

しかし、それは真理というコインの片面ではあるが、両面ではないのではないのか。

たしかに、私などは、日本海側から吹きつける海風や雨を受ける中国山脈の裏日本、山陰に生を享け、そこに十九歳の春まで生活したので、今でも日本列島の西方の、日本海の側で収穫した米や玉ネギやその他の野菜、あるいは川や海の魚を送って頂いて食べると、体の芯からホッとする。味とは、舌だけの問題ではなく、内臓にも脳にもかかわる。

家庭の中でのお袋の味のみでなく、郷土——大地——の味も懐かしい。それは地域の風土の味であり、まさに心土不二である。

同じ日本海側の福井、金沢、新潟、山形、秋田、さらに青森あたりに行つてその食べ物をいただいて

も、いや食べ物の前に、日本海から吹き寄せて来る湿った空気を吸うと、やはりホッとする。身体がそう感じる。郷愁というものか。

風土と人間のいのちの間には、切つても切れない縁があるらしい。

しかし他方、われわれには、旅愁というものもある。山陰生れの私には、瀬戸内海や太平洋の側の土地を訪ねて、その土地の産物や魚などをいただく、違った味がする。とても美味しい。けれども、それは郷土の懐かしい味ではなく、またホッとする味でもない。物珍しい、異郷の、異国の味である。異種の美味しさである。旅愁の味とでもいうべきか。

ひところ、「どこか遠くへ」というキャッチコピーが国鉄（JR）の電車のかかっていたものだが、われわれは、いつも年から年中生まれた村に閉じこもってばかりいると、時には異郷の味が欲しくなるものなのであろうか。

近年、地産地消というスローガンも唱えられる。出来るだけ住んでいる土地で採れたものを消費しようという意味である。その理由の一つは、遠くで採れたものを運送費をかけてわざわざ運んできて消費することは無駄である、ということにある。これも妥当な理由である。

グローバル時代に、金さえ出せばいくらでも外国から食料を輸入できるというので、世界中から買いまくるといふ行動は好ましくない。そういう無駄なコストは掛けない方がよいであろう。地球生態系の維持のためにも、食料の輸出入が過度に及ぶのは好ましくないであろう。

ただ、人類は、地球上で採れる珍しいものを輸入し、輸出し合って、狭い地域に限定されない楽しみを味わいたい。これも、たまには「どこか遠くへ」と旅をしたいという欲求の現れであるから、一概に「だめだ」と否定できない。問題は、程度なのではないか。

古里の味への郷愁と、旅の味と、旅への旅愁と、双方組み合わせの妙を考えたい。それは食い物に限らない。万幸、バランスが大切ではないか。

身土不二といえば、自然崇拜と結びつき、無農薬、無人工肥料、無金肥、堆肥尊重、自然栽培、有機栽培を好む立場でもある。

むろん、農薬たっぷり、人工肥料（金肥）のみ、というのは危険であるが、しかしある土地で穫れたものだけ食べて一生暮らすのは、天然自然かも知れないが、それも危険なことである場合が少なくない。

私の生まれた島根県、石見の国、杵木村の隣り、津和野町の盆地は、文豪の森鷗外の生地であり、観光地として有名になったが、惜しいかな、昔から温泉が出なかつた。

山を越えて隣の山口県に出ると、湯田とか俵山とか、有名な温泉が少なくない。しかし、津和野は、全国からいらつしやる観光客にとっては、バスで二、三時間立ち寄るだけ、素通りするのみに、泊つても面白くない街であつた。

というわけで、温泉が欲しかつた。太古の火山らしい姿美しい山はいくつもあるから、地下二〇〇メートルもボーリングしていけば、必ず温泉が出るに違いない、と思われた。まさにこの期待と目論みは当つて、温泉らしきものが出た。しかも湯が止まつてはまた噴き出す間歇泉が湧き出た。田園の真中に出たのである。

しかし、狸が獲れて皮が手に入ったと喜んでみたものの、やがて周辺の稲が変色していき、枯れてきたという。なぜなら、その間歇泉には稲に良くない成分が含まれていたのである。

町当局は、あわててその温泉のパイプにフタをしたそう。それで事無きを得た。今行くと、どこにあつたか、外来者には発見できない。

今日、各地で温泉発掘ブームであるが、地中深く掘ると、地層の中に何が混じっているか知れたものではない。われわれが目にする地表の土壌は無害であつても、何百メートルという地下には、塩あり、硫黄あり、その他、重金属なども含有され、様々な物質が隠れている可能性がある。

東北でも、関東でも、関西、九州、四国でも、温泉地帯から流れ出る川で、魚が住みにくいとところが多々あることは、皆さんご存じの事と思う。

海外でも、経済援助の一環として、「砂漠に灌漑農業を」という趣旨から、苦勞して水路を引く。ところが、畑に水を流すと、やがて地中から塩が上がって来て作物が穫れなくなる。毛細管現象により、地下の塩

分が地表に湧き出るからである。こういうように、一旦は成功に笑ったものの、次には泣く、という出来事は、大地を相手にする場合、世界各地で珍しくない。

自然は、優しく恵み深いものであると共に、恐ろしい面も秘めている。文明の作り方では、われわれは、盲信を超えて、思慮深くなければならぬ。

土地によつては、自然、大地、風土に、危険で有害な所もあるのである。これは地域として悲しい運命ではあるが、致し方ない。

自然はいつでもどこでも優しく、安全であるとは限らない。その風土には安心して抱かれ、親しんでよい、という訳にはいかないことがあるのではないか。身土不二、有機農法イコール安全かつ安心、とは必ずしも言えないのではないか。

身土不二ということは、昔から力説されてきた指針であり、貴重な真理が含まれているのであるが、しかし科学的に見れば、ややもすれば矛盾する面が伴う。グローバル時代において、地球的なスケールで人類の必要とする食料の生産に関しては、難しい条件が求められるのである。

土壌肥料学の上からは、特に窒素（チッソ、N）、リン（P）、加里（カリウム、K）が植物の生長のために大量に必要であり、それだけに欠乏しやすい要素であつて、これらを三大栄養素と呼んでいる。ここに問題が潜んでいるのである。

このうち、窒素は空气中に大量に存在し、それを固定して窒素肥料（尿素）を造る方法はドイツによって確立した。加里（カリウム）も海水中に無尽蔵に含まれるから、供給にそれ程困難はないであろう。

問題はリン（リン）なのである。リンは各地の土壌に不足しがちなのである。ところが、リンは海鳥の糞が絶海の孤島に長年かかつて積み重なり、燐鉱石（グアノ）という形で存在し、それを人類は採掘して肥料とし、耕地に施すのだが、これは地球上に偏つてしか分布しない。

大量の穀物輸出ができる国でも、耕地から燐が不足し易いということに変わりはない。毎年毎年、穀物輸出を続けていると、その国の農地の土壌中に燐が不足して行く。アメリカ、カナダ、オーストラリアなどに於ては、燐の不足を輸出国の土壌に引き起こすのである。その分、土壌が劣化する。

穀物を収穫するということは、土壌中から燐を取り上げ収奪して外部に移すことでもある。穀物の輸出は、また肉とか野菜の輸出でも同様に、燐の不足を輸出国の土壌に引き起こすのである。その分、土壌が劣化し貧困化する（石塚喜明「日本の食料問題 見落とされている重大な点」『学士会会報』八四九号、二〇〇四年十月、二七ページ）。

ただ、どうにか助かっているのは、水稲の場合、畑作と比較して灌漑水を通じて燐がある程度、供給され続けるという事実である。この点で日本の水稲農業は救われている。日本は、グアノ鉱石は無に等しいから、先人が発達させた灌漑農業のお陰をこうむっている。

だから、米は外国から輸入すればよい、水田は要らない、とばかりに国内の灌漑農地を破壊するならば、輸出国ともども、やがて末恐ろしいことになるのではないか。グローバル化とは運命共同体化なのである。

この面で見ると、日本の水田で水稻を栽培し、それを食するのは、「できれば、自分のところで採れたものを食べるほうがよい」という「身土不二」の教えに合致する。

しかし、他の面では、日本の特定の地方の風土では供給できない作物があり、あるいは国土には場所によって有害な物質も含まれるので、各地の食料供給は余りに特定の地方の土壌に固執し過ぎないほうがよいという次第である。

但し、現代のわれわれの都会の——田舎でも——生活には、燐を使う化学的な洗剤用品は数多く、それが下水を通して川に流れ込み、海にまで達して、天然の状態に比べて富栄養化の問題を引き起こしている。なにか、この燐を回収する技術ができないものかと、常日頃、思っている。

洗剤だけでなく、肥料として施された燐肥で植物の吸収しなかった部分があり、用済み分は排水や地下水に溶けて田畑から川や湖に流れ込み、海に達する。

また、昔われわれが子供の頃には有機燐剤というものがあり、薬剤として大量に水田に使われていたが、それが役目を果たすと分解してやはり水に溶け川や地下水に流れ込む。これも、なんとか回収できないのか、と考えていた。

これは、風土の情報というより、むしろ環境汚染の問題になるが、現代の文明では、人類が遠方からもつて来た天然の鉱物の成れの果て——廃棄リソ——を再利用（リサイクル）する技術を、到るところで開発しなければならぬのである。

まさに現象は至るところで繋がり、連絡しあっているので、われわれは仕事の持ち場で、また消費生活のところで、できる限り、リサイクルの方法を工夫し実行するようになりたいものである。

われわれの「自然」信仰には、科学性と智慧の裏づけがなければならないだろう。人類は大自然の只中に生かされている一つの弱き生物にすぎない。好き放題に自然を支配し、有頂天になれば、必ず自然の返しを受けよう。だが自然に埋没して生きることも危ない。

古今東西、中庸ということが推奨されてきたゆえんが、こういうところにもあるのではないだろうか。

大陸の詩人杜甫は詠った、

「国破レテ山河在リ、城春ニシテ草木深シ」

しかし、「山河荒レ、草木枯ル」ならば、人造の国も城も、一体どうなるか。逆の問いを忘れてはなるまい。

五、社会情報力——情報システムと危機管理——

風土の上に成り立つ人類の社会も、情報のシステムである。国家社会は情報力の体系なのである。その第一要素としては国家社会の内部に蓄えている情報力が含まれる。中でも科学技術情報あるいは科学技術知と呼ばれるものは、今日の国家社会の生命力を左右する。

大学や研究所、あるいは企業などに属する科学技術研究システムは、決定的に、一国の生命力を支える。アメリカは、一九三〇年代にドイツのナチスの迫害を逃れて渡って来た科学技術者のお陰で、第二次大戦後、世界の高等な学術研究と教育のセンターへと押し上がった。ノーベル賞がすべてではないが、その受賞者数も世界トップへと激増した。

社会情報力の第二要素は、通信を含む社会のコミュニケーション力である。情報というものは、自由で活発なコミュニケーションによって合成され、増殖し、力を発揮する。コミュニケーションとは、情報の遣り取りであり、一人ひとりの人間の間の、そしてまた集団・組織の間での、遣り取りである。そのことを通じて情報の新結合と化合——イノベーション——を起こす活動なのである。

だから、情報の自由なコミュニケーションなきところ、情報創造のスピードは鈍くなるのである。

今日なお中国のように、一党独裁を堅持している社会主義の「国家」も、インターネットの時代には、言論の自由化へと進まざるを得なくなるであろう。

情報活動のためには、新たな社会制度を構築しなければならぬ。情報の社会制度がどのようなものとなるべきかは、物やサービスを扱う活動と対応させて考えられるであろう。つまり、最低限、次のような制度が必要となるだろう。

- ① 情報（情報財、智財というもの）に関する知的所有権の確立——これには個人情報保護というプライバシーの保障が含まれる。
- ② 職業選択の自由、または生産と営業の自由——資源を開発して製品を生産し、商品として市場で売り買いする自由。
- ③ 情報労働の市場の確立——従来の労働市場と概ね同様でよい。
- ④ 消費者主権の保障——情報を消費する者の情報購買、消費、そして廃棄の自由の保障。
- ⑤ 契約履行の制度——不履行への処罰制度。
- ⑥ 信用の倫理道德——情報の取引に関する倫理道德の確立。
- ⑦ 情報の測定と価格づけに基づく取引場——智場というものの確立。
- ⑧ 情報取引のための金融資本市場の確立——これは物財の市場と概ね同様でよい。

以上は各国で必ずしもすべて出来上がったものではなく、目下、整備され出来上がりつつある途上のものであって、未発達の部分も残る。

こんな国家では、国民は問題が深刻になってから初めてそれと気づかされることになり、大抵は手遅れになり回復不可能になる。政府外務省も「何度も抗議しました」（川口順子外務大臣、二〇〇四年当時）、などと小さな声で弁解する程度で、政府は問題から逃げて回る。外務大臣もころろ交替する。こんなにも情報音痴の国家は、紛争に負け、衰微するほかない。

また、国民の情報力としては、自分たちの機密情報を簡単に外国に漏らさないとという情報保持力が求められる。これはエゴイズムではない。先にも触れたが、太平洋戦争中は、日本の外交及び軍事戦略にかかわる暗号情報がアメリカによって殆ど完全に解読されてしまっていたらしい。日本が何をしようとしているかは、アメリカ側に筒抜けであった。それだから、アメリカのエゴイズムに利用されるばかりであった。

日本の国家機密は、非常にたやすく外国に盗まれる、との定評がある。こうした情報の安全（セキユリティ）は、社会情報力において絶対無視してはならぬ側面なのである。

さらに、社会情報力の中で、というよりそれを超えてもっと広い意味で、特に忘れてならないのは、危機管理の情報力ではないか。

危機管理とは、国家社会の内部もしくは外部から社会の成員の意図しないときに、ショックという形で衝撃が襲う時に、そのショックを吸収し、和らげ、マイナス効果を減らすことである。

危機管理情報の問題には、天災についての情報が含まれる。

私事で恐れ入るが、昭和十八（一九四三）年、私は二歳のころ、折からの台風で倒壊した家の中で寝かされていて、危うく押し潰されそうになったことがあるらしい。このように親から聞いた。

裏山には直径二メートル以上もある赤松の大木で幹の途中でボツキリと折れたものがあつた。普段、川の水が上がりもしない高い所の水田に上り、そこを丸太が転がって流され、洪水が引くと砂と石ころの河原に一変していた。そういう光景を、成人するまでに幾度か目の当たりにしてきたのである。

日本が土建国家となる理由の一半は、こうした災害の多発にもある。

私の家は、それからずっと中学三年まで、掘って建てた小屋であつた。リンカーンが生まれて育つた家も丸木小屋であつたというから、こんなものかなと思ひながら育つたのだが、彼の家は掘って建てた小屋ではなく土台があり、今日で言うログハウスであつたのだろうか。

台風の襲来には、それ以来、何度も出会ってきたが、ラジオ、そしてテレビから聞こえる気象庁の天気予報が、段々としつかりして来たので、予測がつくようになった。

大きな災害は、歴史上、かなりの循環性を示しながら、繰り返すようである。自然界は呼吸しているであろうか。各地は、その土地の災害の歴史を学んでおかねばならない。

昔から、地震・雷・火事・親父という諺がある。

地震が筆頭に來るところが面白い。地震は天災の代名詞であつて、火山の爆発、津波と水害を含めることが必要であるが、危機としては日本列島では地震が「最も避けられない天災」だからであろう。地震はいわ

ば大地の寝返りでありクシャミであり、火山は大地の発熱であり火事であるといつてよい。しかし、地震の被害状況から見ると、現代の文明の作り方にかんりの程度無理があることは明かだ、単なる「復旧」でなく「新生」を考えるべきであると思われる。

もう随分昔のことになるが、雲仙の火山爆発では、大規模な火砕流が走り、それと水害が重なって、住民の避難は長期に及び、移住さえ必要となった。三宅島は東京都に属する島だが、そこでの火山爆発では、爆発後、有毒の火山ガスの噴出が長引き、島民が全員避難しなければならなくなった。

二〇〇四年十一月二十三日、突如、新潟西部を襲った「中越地震」は、その直前の近くの地域での水害に引き続いて発生し、山古志村のように全村民が避難を余儀なくされた地域さえもある。まことにお気の毒なことである。

しかし、この災害の経験は、今後に徹底的に生かすべきである。私の体験や中越地震での経験から、新生のための方向性を以下に考えておきたい。

①情報の連絡システムを再構築する必要がある。

現今の地震情報、火山情報、水害情報などの通報システムは、気象庁から、都道府県知事、市町村長へという経路であり、これでは住民に伝わらない事が多い。消防が末端の情報伝達の役を担うことになるが、そのネットワークにも問題がある。

水害のときの情報も、土砂降りの雨の中では、有線放送では通じない。電話線が切れることも多い。自動車からマイクで警報を伝えて廻る方式も、雨戸を閉め切っていると、家の中の人々には聞こえない。

②言葉の問題もある。

報道によれば、「避難勧告」と「避難指示」という言葉がダブって聞かれた。勧告ということになると、法律に従って、強制的に避難しなければならぬということのようであるが、指示は避難したほうがよいですよというくらいの、お薦めに過ぎないそうだ。

法律の言葉は正確のようであるが、いな混同されるような表現が多い。勧告は「強制避難」、指示は「任意避難」くらいに言い換えた方が増しだろう。

③心のケアの問題もある。

今回の新潟地震では、「頑張る」という励ましは止めたほうがよいと、心理学畑の人々の発言がしばしば聞かれた。しかし、被災者を慰問された天皇皇后両陛下も、「頑張ってください」というお言葉を使われた。

一体、「頑張れ」「頑張りました」「頑張ったね」という励ましは禁句なのであろうか。このさい、本当のカウンセリングの知恵を活かしたい。

鬱（ウツ）では、「死にたい」と思い詰める位、苦しいのだから、「頑張れ」という励ましは禁句だとい

う。もうそれ以上頑張れない位耐えているのだから、頑張れといわれると辛いのだという。

では、どういう言葉がよいのだろうか。希望のもてるような言葉がよいともいわれるが、実際には、どんな言葉がよいだろうか。お互い、この機に知恵を交換し合いたいものである。

④癒しが大切である。

童謡を聞くことが、心の故郷を思い出させ、氣力を蘇らせて呉れたという人もいる。かつての神戸震災の被災者の一人は、ラジオで「おぼろ月夜」を聞いて、元氣を取り戻したとも言っておられた。

また、どちらかというところ、テレビよりもラジオのほうが、映像に攪乱されず、心を静め、心を研ぎ澄まし、集中することができるようである。

⑤身障者、とくに視覚障害者への支援が問題

後日、ラジオを聞いていると、目の見えない視覚障害者の方々は、避難するとき非常に困ったところである。さらに、どうにか避難場所に落ち着いてからも、慣れない場所でのことであるから、手探りで勝手が分からず、食事、トイレなど生活万般において、親切な案内が必要であったという。寝たきりの老人の方なども同様であろう。

私などが子供のころ災害に出会った時代には、ラジオさえ碌になかったから、お互いどんな苦労に出会ったか、すぐには知る由もなかったのだが、情報機器が発達した今の時代になると、いろいろなことが直

ちに判明する。それを今後には十分活かさねばならない。

災害時のために役立つ人材（育成）も、ライフラインの一環であり、ソーシャルキャピタル（社会資本）の重要な柱であろう。

⑥避難場所の問題もある。

人間は生き物であるから、食うこと、排泄すること、寝ることの三つが、欠かせない。食料、トイレ、風呂、寝具は、必需である。暑さ寒さの問題もある。仮設トイレは、建築現場にあるものと同じだが、あれはまったくいただけない。臭いし、便秘になるだろう。

また、プライバシーが守れるようにしたい。そもそも、避難場所としては、決まって学校や公民館の名が出てくるが、それしかないのか。

そして、仮設住宅造りは、もっと手取り速くできないものか。

⑦物よりお金の支援をする。

ニーズに応じて物資も大事だが、たとえ小額でも、心を込めて贈れば、お金のほうが、支援としては受け取るほうにとって融通が効く。一つ一つ丁寧に支援し、一人一人に、公平に対応し、ケンカを起さないうように、支援の計画を立てる。こういったことが求められる。

⑧歴史の経験に学ぶ。

それぞれの地方では、災害にどんなものがあつたか、ということ常日頃、歴史の経験から学んでおくことが不可欠である。郷土史を学びたい。

昔、東京の西を流れる多摩川で「狛江の水害」というものがあつた。危険地域に住宅開発が行われたと東京都が訴えられた。私はその出身の人の家に下宿していた。そのご主人のいうには、

「あんなところに家を建てるといふことは論外だ。あそこは昔から水害の場所だ。」

住宅開発をすること自体、誤りであつた。郷土の歴史から学ぶことが先決なのである。

二〇〇四年に起こつた中越地震の地帯は、友人の私信によれば、一九三三年にも同様のものが襲つたところだといわれる。その時の記録は残されていないなかつたのだろうか。

今は、過疎村ばかりで、被害地の農業者たちは年寄り、立ち上がつて農業を再開する気力が失せてしまう人も多かろう。時代状況が変つてしまつた。

⑨文明の造り方に大いに問題がある。

中越地震の襲つた新潟県の西半分の地域は、土質からして崩れやすいところが多い。そこに自動車文明時代というので、無理に山を削り、崖を造つて道路を拡張した。崩れないほうがおかしいわけである。

私も棚田のある山国育ちだからよくわかるが、奥の集落に行くのに一本の道しかないというのでは、その道が崩れるともうその集落は孤立する。道の造り方に工夫が欲しい。

また、都会並みに、どこでも一本の管で水道を引く、ガスもそうする。これでは電池を直列に繋ぐような方式であつて、事故が起きると全部がアウトになる。もつと、並列システムの知恵を活用すべきではないか。

そもそも、人工システムのみに偏らないことであろう。

青柳正規さんは、新潟地震に関して、循環型と蓄積型という区分を立てておられる。なるほどうまい見方である。

「災害で家が壊れたら、村の入会地に入って木材を採り、同じような家を建てるといふ社会制度を持つていた。」これが循環型である（対応の柔軟性を取り戻そう）、読売新聞夕刊二〇〇四年十二月一日、ルビ追加）。

反対に、地震国でもイタリアなどの「蓄積文化」では、壊れない頑丈な造りを心掛ける。石とコンクリートと鉄筋ということになる。

しかし、循環型は難しい。「柳に風」と言う訳に行くまい。どうすればよいか。

われわれ人類というものは、私を含めて、一面で便利な文明装置を工夫し設置したい動物のようである。数年前、長野県から岐阜県に抜けるトンネルを通つて、ある山村に出た。岩の間から迸り出ている岩清水をみつけたので、五十年前の子供のころの癖で、近寄つて手で掬い口に運ぼうとしたところ、「それは止めたほうがよい」と制止された。

山頂近くにはハイキングの人々の通る道が縦横に走っているの、水には大腸菌がウヨウヨであるか

ら、と。南アルプスの天然水と広告にいうが、汚染され切っているであろうか。エレベストでさえごみの山であり、日本アルプスなどは言うに及ばず、か。

だから、山古志村などのように岩清水のある管の山村でも、すべて人工的な上水道を引くことになる。下水も人工の下水道にする。糞尿などの排泄物も畑に撒かず、浄化槽で一応きつと浄化した後、直ぐに川へと流す。結果、川は汚れる。

現代文明とは、一方で汚れを増やしつつ、しかも、汚れを処理すると称して、「汚れの場所を移動させる」のみではないのか。

生活一切を「費用をかけて人工物で埋め尽くす」というのが、便利さを追求する現代文明の結末である。その弱点を、地震が狙ったことになるのではないか。

われわれは、一体、どうしたらよいのだろうか。やはり、ライフラインを人工物の文明装置だけで繋ぐのではなく、もつと各地の自然物を組み込むという工夫、つまり二股型の文明、並列型の文明は構築できないのだろうか。

ここに、新生の課題があらう。元に戻る復旧では足りない。目下、被災からの復興は急がれるが、これは長い目で見ると、科学技術の問題であり、価値観と考え方、すぐれて情報——心と知——の問題なのではないか。

歴史の進歩は、復旧というよりも新生への工夫からのみ実現されるのではないか。それであってこそ、破壊や災害の苦しみも活きてくる。

(本稿には、漢字離れの若い読者のためと、外国人留学生の日本語学習のためと、二つの理由から漢字の数を増やし、かつ多くの漢字にルビを振った。原稿の打込みなどコンピュータワークについて、栗山聡未君から多大の助力を頂いた。ここに記して感謝する。)